

## 教科主張

### 音楽科の本質

子どもは、魅力的な音や音楽に出会うと「楽しそうな曲だから歌ってみたい」「どうすればこんなふうに演奏できるのかな」「どんなリズムがいいかな」「好きな感じだからもっと聴いてみたい」など、様々な思いをもつ。そして、自分と音や音楽とを結びつける中で、自分の目指す表現が生まれ、音と向き合いながらくり返し試したり、友達と対話しながらよりよい音楽表現になるように吟味したりするなど「こうしたい」という思いや意図をもって試行錯誤をしていく。そうすることで、徐々に目指す表現と音楽を形づくっている要素とが結びつき、知識や技能を獲得していきながら、音楽的な見方や考え方を広げたり深めたりしていく。このように、音楽を形づくっている要素の働きが生み出すよさやおもしろさ、美しさを実感することで、子どもの音楽に対する感性が高まっていくだろう。そして、新たな音や音楽に出合った時、それまでの経験を生かしながら自分の目指す表現に向かって活動したり、音や音楽を味わったりすることができる。

このような学びをくり返していくことで、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わり、生涯にわたって音楽に親しんでいくようになるだろう。

### 音楽科の考える『その子らしく学ぶ』とは ～人間性の涵養につながる経験～

音や音楽に出合った時にもつ思いは「初めて聴くな、何の音だろう」「いろんな楽器の音がした」「いつも聴いている曲より速いな」など、その子によって違う。そこには、これまでの経験や感性などの「その子らしさ」が影響しているだろう。そうして思いをもった子どもには、学びを進める原動力が生じ、自分と音や音楽とを結びつけながら進んでいく。その中で、自分の目指す表現が生まれ、曲想に合った声色を試しながら歌ったり、自分の思い描く音を探そうと様々な楽器に関わったり、わずかな音の違いにこだわって最後までじっくり向き合ったりするなど、目指す表現に向かって何度も試行錯誤をしていく。そし

て、新たな発想を得たり自分の表現を見つめ直したりして目指す表現を更新する。このようなプロセスそのものが音楽科における「人間性の涵養につながる経験」であると考えてる。

自分の目指す表現に向かって思いや意図をもち試行錯誤する子どもは、音楽を形づくっている要素を手掛かりにして「その子らしさ」を発揮しながら学びを進めていく。例えば、音色の違いを手掛かりにした子どもは、様々な楽器を鳴らして音色を確かめながら、その子の感性を基に「どんな音が物語の様子に合っているかな」と自分の目指す表現に合った楽器を選択する。さらに「もっとイメージに合う音にするにはどうすればいいのだろう」と楽器の叩き方や叩く位置を工夫しながら自分の目指す表現に近づけるなどしていく。また、強弱を手掛かりにした子どもは「役になりきって歌おう」という活動において、登場人物の性格に合わせて「勇気をもった感じを表現するために、だんだん大きく歌ってみよう」と声の強弱を意識しながら試行錯誤をくり返す。その中で同じように強弱を意識して歌う他者と関わり「だんだん勇気をもっていく感じが伝わった」と価値付けられることで、より自信をもって歌唱に取り組み、それによって歌唱の技能が向上していく。

このように、自身で構築したプロセスと創造した知を一体としていることが真の「学び」であり、『その子らしく学ぶ』ことで、その子の音楽に対する感性が高まっていく。そして、音楽を『その子らしく学ぶ』ことは、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わり、生涯にわたって音楽に親しんでいく姿につながり、その子の人生をより豊かにするだろう。

